

第百八十八話 戦略の大転換出来ず、泥沼に！

支那事変は、解決したいと皆が願いながら、もがけばもがくほど泥沼に引きずり込まれてしまったような戦いであった。何とも悲しくなる。意図せざる拡大の要因は何だったのだろうか？それを知ることは己を知ることでもあるのではないだろうか。

1 支那作戦等推移概観

盧溝橋事件(1937/7/7)事件の不拡大方針が破綻し、内地三個師団の動員下令で天津軍が攻撃開始して、北支に戦火が拡大した。船津和平工作も挫折した。上海居留民保護のため、第二次上海事変(1938/8/13)が起き、戦火は中支に拡大した。期待をかけたトラウトマン工作も、頓挫した。大本営は、南京攻略を発令(12/1)し、12/13日首都南京が陥落した。8月15日以降には、渡洋爆撃を開始している。



翌年は、徐州作戦(4/7~6/7)を、次いで武漢(漢口)作戦(1938/8/21~10/27)で武漢三鎮(武昌、漢口、漢陽)陥落、更には広東作戦(10/12~11月)を行った。

1939(S14)年には、新首都重慶に対する爆撃の他、南昌等を攻略し占拠地域を拡大した。1940年には宜昌作戦(5~6月)を、1941年には、第一次・第二次長沙作戦を行い、1943(S18)年には湖北省で江北殲滅作戦(2~3月)、江南殲滅作戦(4~6月)、常德殲滅作戦(11~12月)を行った。

1944(S19)年には大陸打通作戦(4/17~12/10)を、1945(S20)年3,4月にも湖南省湖北省で二つの作戦を行った。

2 支那事変の長期化は？

日米戦も予期される状況で日本としては何とか支那事変を解決したかったのであるが、相手の戦意を見誤り、現状打開を図る積りが逆に泥沼に引き込まれていった。思いとは裏腹に戦線が拡大してしまった。

- (1) 蒋介石政権及び国民の継戦意思の判断見誤り
- (2) 陸軍の作戦による国民政府軍の殲滅・撃破・屈服が出来ず、逃げられ遂に捕捉し得ず。作戦失敗をカバーせんとして次の作戦を計画？
- (3) 「対支一撃論」は、奏効せず、結局成功しなかった。中央の不拡大方針を現地部隊は受け入れず、厳正なる軍紀の維持は？結果が良ければ良しとする風潮が蔓延？
- (4) 陸軍省部首脳陣の意見対立もあり、一貫した作戦指導欠如
- (5) 軍事作戦に目的を付与すべき攻略の腰が据わっていなかった。「支那事変処理根本方針」(S13/1/11)や「日支新関係調整方針」(S13/11/30)などの御前会議決定はあるものの、独善的・総花的で、情勢の厳しさが反映されていない。軍事が政治をリード・引き摺り廻したと辛口の評もある。
- (6) 近衛首相の二度にわたる声明が蒋介石政権や欧米を刺激
第一次近衛声明(1938/1/16)：「国民政府を相手とせず」
第二次近衛声明(1938/11/3)：「東亜新秩序」提唱、汪精衛との連携模索
- (7) 北支のみならず中支にまで戦線拡大しても収拾が出来ないのであれば、思い切った戦略転換が必要だった筈だが、挑発に乗せられ、現状打開策に終始した。
- (8) 北方ソ連の脅威を意識しての支那戦線であり、十分な戦力展開をしたのか？
- (9) 和平の好機有るも、和平条件の吊り上げなど以ての外だ。
- (10) 傀儡政権樹立の功罪は？汪政権との間で「日華基本条約」重慶蒋政権と併存

総じて、極論すれば、政治のリーダーシップなく、陸軍統帥の厳正さなく、冷静な大局観なく、現状打開に墮し、抜けるに抜けられなくなったと云えるのだろう。

我が国欽定憲法下における政軍関係の最大の課題を遂に解決し得なかった。

* 戦略の大転換は凡人には為し得ないのだろうか？支那を解決せずして日米戦とは！！

(第百八十八話 了)